

大平さんの海外出張にお伴して

森永貞一郎

私が日銀総裁を拝命したのは昭和四十九年十二月半ば三木総理からである。福田さんが副総理で経済企画庁長官、大平さんが大蔵大臣で、両大臣の推輓によると思うが、直接内命をいただいたのは発令の数日前大平さんからであった。私は「外国関係のことがどうも苦手で……」といささか躊躇したが、大平さんは「副総裁に外国通の前川君がなることだし」と励まされたことを記憶している。ところが就任早々翌一月の中旬には IMF の暫定委員会や世銀も共催の開発委員会がワシントンで開かれることになっていて、早速大平さんにお伴して出かけることになり、内心弱ったが、まあ新任の挨拶を兼ねてということもあり一日先行した。

大平さんが着かれたのは会議の始まる前夜で、時間的には無理であったが、早速大平さんの室で大蔵・日銀の随員を交えて打合せ会が行われた。会議は五力国の蔵相、総裁の秘密会議、先進十力国の蔵相、総裁会議、暫定委員会、開発委員会と、二、三日間連続で打合せ事項も盛沢山である。年末の予算編成のご苦労を癒される暇もなく直行で駆けつけてこられた大平さんはいぶお疲れの様子で、時々あの細い眼をつぶられる。すると首席随員の吉田財務官（現アジア開発総裁）が説明の声を大きく張り上げ、大平さんの眼を覚まそうとする……というようなことが続いた。一晩休まれた翌朝はすっかり元気をとり戻されて「昨夜は眠くて失敬したなあ」と呵呵大笑されたことを覚えている。その日は確か日曜日で、郊外のサイモン米財務長官私邸での五力国蔵相、総裁の秘密会議で一連の会議の幕が開けた。猛烈な吹雪で、そのなかを私服が嚴重に警戒している。昼食をはさんでの数

時間の会議で、出席者は各国とも蔵相、総裁の他は担当官が一人ずつ、日本は吉田財務官が出席して要所要所を適宜通訳してくれた。議題はいろいろあったが、中心はIMFの出資等から金を外す（このことは既に基本方針が決定されていた）ことに伴い、各国の金の取扱いをどうするかということ、この問題では米仏間の意見が対立した。大平さんは米側に同調されたが、その日は結論に達しなかった。

次の日は早朝からまず先進十カ国の蔵相、総裁会議で、暫定委員会に臨む先進国の態度が打合せられた。議長は各国蔵相の持廻りで今回は大平さんが議長である。この会議では、暫定委員会や開発委員会と同様、日本語の同時通訳が認められていて、大平さんは、英語もお得意だが、この日は堂々と日本語で議長を務められた。何しろ一時間の短い会議で発言者相次ぎ、大平議長も補佐役の吉田君もたいへん忙しかった。会議をおえて、さすがに大平さんのホツとされた様子が今も眼に浮ぶ。引き続き暫定委員会では予定通り金の公定価格の廃止について合意された他、各国の経済情勢の説明も議題で大平さんも簡潔に発言された。会議中キッシンジャー氏と会談されるということで暫く中座され、その間何の問題であったか、私が代って発言したこともあった。

この出張は私としては初めての国際会議でIMFや世銀の問題を勉強する意味でたいへんよい機会であったし、大平さんから直接間接いろいろ教示を受けた次第だが、そのことその他に就任後大平さんと初めてゆっくり国内の金融政策について懇談する機会を得たことは大きな収穫であった。その後も九月のワシントンのIMF、世銀の総会や暫定委員会に、翌年一月のジャマイカのキングストンでの暫定委員会等にも大平さんにお伴した。その間、金問題についての各国の合意が進む一方、余人を交えず国内問題についても隔意なく話し合う機会を与えられて有難かった。いつも帰ってきてからの記者会見で「大平さんと何を話したか」と責められて困ったことを思い出す。

（前日本銀行総裁）